

## 「少女都市」の発想

キュレーター 小池 一子

もし第7回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展の主題がCITTÀ: LESS AESTHETICS, MORE ETHICSでなかったら、私のような建築の領域外のものが日本館の構想に参画することはなかったかもしれない。また第6回の同展が「震度計としてのアーキテクト」の主題をもって建築家の問題意識に切りこんでいなければ、建築のことは建築家にという通念に私も疑問を持たなかったかもしれない。

今回の主題が問いかけているのは、「都市については美学よりもむしろ倫理的な考察が必要ではないのか」ということである。ここにはフォルマリズムの文脈から生まれる都市景観や都市計画の見直し、建築の問題を建築言語以外のさまざまなヴォキャブラリーで語ることなどが示唆されている。

日本館の主題設定については、そのような承前の了解をもとに、コミッショナーの磯崎新さんとの対話から焦点を絞っていった。

日本の政治、経済、教育そして社会と生活の隅々にまで、現在見受けられるのは、戦後50年とそれを遡る近代国家としての構造疲労である。それを男性中心の機構の歪みとすべて断定するのは短絡としても、構造を支えてきた制度の中で、「性」の問題が放置されてきたことは明らかである。

エティカ(倫理)を制度への問い直しとしてとりあげ、ジェンダーをその中心にすえるという発想がここで生まれた。

さらに、ジェンダーの地平にゼロ地点という仮想を立て、制度に組みこまれる直前のヒトの存在として「少女」を打ち出すこととした。

少女については、ふたつの文脈から検討している。ひとつは感受性の豊かな時間帯。男性であれば少年時代をふり返ってみてほしい。どれほどの想いをこめて、生、性、生活、家族、未来に至る時間などについて、感じ、語り続けたことか。折しも14歳の犯罪が日本を震撼させた、見方を変えれば14歳ならばこそその事件であったともいえる。

たとえば少女は13歳で、生きものとしての知覚も本能も万開である。だが、大人ではなく、子供でもない。「豊かな感受性」にふり注ぎ、つき刺す情報網の中の時間帯。

ここにおいて、ふたつ目の文脈を見る。日本の都市で顕在化している少女現象である。これを磯崎さんは「世界のどこの都市よりも早くに、変質を開始しているメトロポリス・東京の深層部におこりつつある事件」とカタログに著している。

家族という括りの消滅に象徴される器(建物)の変容は、少女たちが外へ(都市へ)流れ出ていく存在となることを促してきた。いや個別の部屋を与えられていても流れ出ていく意識と言うべきかもしれない。

ケイタイ、ネット、メールなどなどの皮膚感覚化した通信網、カワイイという言葉に集約される同世代感覚、その反映としてのおびたしいグッズ、ファッション。それらが一部のビジネス

の活性化という結果をもたらしつつ、元気に、輝いてみえる「少女都市」が現出しているのだ。

「自由と高慢」。少女意識を批評の原点に据えた高原英理は、少女の特性をこう形容しているが、無制限でひとりよがりの自由とプライドを彼女たち自身、持てあまし気味に、それでも、他のどの世代の女性よりも男性よりも目立つ存在として日本の都市の顔を作っている。

建築家、妹島和世・西沢立衛両氏には、このような発想に立つキュレーションの核心を伝え、彼ら自身の構想とインスタレーションに託した。

身体と衣服の領域からデザイナー、津村耕佑。日本の少女の肖像を特写したヘレン・ヴァン・ミーンはオランダの写真家。そして少女都市の住民自身でもある新人できやよい。3人のゲストアーティストを含むキュレーションには、当然のことながら、領域外しの意図があった。デザイン、アートの領域、国家間の領域、それはヴェネツィア・ビエンナーレの一世紀にわたる構造についても問われる問題である。第一次大戦前、あるいは第二次大戦直後の列強の国々の展示館が、2000年以降の世界の現実を映しとる表現の器として十分であり得るわけがない。また、建築展に他ジャンルのアーティストの導入を呼びかけたディレクター、フクサスの意図も今後の方向を見すえた領域外しの提言なのであった。

エントランス、ピロティ、インテリアと周辺の樹々、足もとのグラベルなどが等価値の白い空間を演出する「少女都市」は、エレガント、ポエティックなどの形容詞を繰り返し聞く人気のパヴィリオンとなった。